論文 ニダバ（Nidaba）41（2012），81-87

象形文字ルウィ語の通時的考察

—initial-a-finalとr転化を中心にして—

大城 光正

1．はじめに

象形文字ルウィ語の言語資料の大半は、紀元前1200年頃のヒッタイト王国滅亡の後に、北シリア、南西アナトリア地域において建国されたルウィ系民族による都市国家群の地域で発見される石碑文（約300碑文）である1）。その中でもルウィ系の新ヒッタイト文化（鉄器時代）成立、繁栄から滅亡の時代（紀元前1000年頃からアッシリア王Sargon2世による支配で終焉した紀元前717年まで）に作成された碑文がその大部分を占めているが、碑文の成立年代が特定できないものが多いために、象形文字ルウィ語の通時的な考察はヒッタイト語の同考察に比べると、ほとんど皆無に近い状況である。そこで、本稿では象形文字ルウィ語の言語的変遷を明証するために、D. J. Hawkins（2000）の編集本において最も信頼できるカルケミシュ（KARKAMÍS）碑文の成立年代を基にして、同碑文中に散見される言語的特徴を抽出分析することで、同言語の変遷の一端を明らかにしてみたいと思う2）。特に、同碑文に散見される象形文字ルウィ語の特異な表現形式としてしばしば引用される、非常にユニークな表記法のinitial-a-finalと、他の諸言語にも散見されるr転化現象を中心に考えてみたい3）。

2．カルケミシュ（KARKAMÍS）碑文の成立年代

カルケミシュの王家時代区分、国王在位期、同在位中に作成された碑文名は以下のとおりである。

古期碑文（BC. 11/10C）： A4b 碑文
Suhi 王家（970-870BC）

Suhi I 世（BC. 10C）： φ
Astuwatamanza（BC. 10C）： A14b 碑文
Suhi II 世（BC. 10C）： A1a 碑文
Katuwa（BC. 10-9C）： A2+3 碑文； A11a 碑文； A11b+c 碑文； A12 碑文
Sangara 王（？）（870-840BC？）： ？

—81—
3. カルケミシュ(KARKAMIS)碑文の特徴 4)

(1) initial -a- final

象形文字ルウィ語の文字表記において、従来、非常に特異な表記法が示唆されてきた。
語頭音の aを表記する場合、当然のこととして、語頭に a の音節文字（象形文字番号
Nr. 450 ) が表記されるべきであるが、この文字が語頭ではなく末尾に表記されるとい
うものである：例えば、文導入辞 awa（音節文字表記 wa > wa-a）。最初の指摘は Laroche
が 1956 年の論文（p. 136）の中で指摘している：「Aleppo 碑文の ki-TESUB-pa-a の表記は人
名*Aki-Tesub を示すもので、末尾の a は正確には語頭に表記されるべきもの =
*a-ki-TESUB-pa」。その後、この指摘を支持するような用例が、カルケミシュ碑文を含むル
ウィ系の都市国家群の地域の出土碑文のみならず、Meskene 出土の印章やヒッタイト王国
時代の岩壁碑文（Nişantepe 碑文等）、更にはヒッタイト王国時代の Emirgazi や Yalburt の
碑文においても確認されることから、この特異な表記法（専門用語としては確立していない
ので、便宜上、「initial -a- final」と呼称）は古い時期からの表記法を示唆している。

そこで、上記の指摘の妥当性を検証するために、碑文成立年代がほぼ明確なカルケミシ
ュの碑文を通時的に比較検討してみたいと思う。特に比較考察が確認しやすい文導入辞の
a-の表出例に限定して例示してみる（initial-a-final は末尾に-a で表示） 5)。

古期碑文

A4b: wa/i-tá-raq(×2), wa/i-tu-tá-raq; wa/i

Suhi 王家

A14b: wa/i-tú-raq; a-wa/i

A1a: wa/i-sa-raq(x2), wa/i-tú-raq(x3), wa/i-mu-raq, wa/i-ta-raq, wa/i-mi-i-raq

a-wa/i(x6)

A11a: wa/i-mu-raq(x2), wa/i-mu-raq, wa/i-tu-raq(x4), wa/i-ta-raq(x3)

a-wa/i(x2)

A11b+c: wa/i-sa-raq, wa/i-tú-raq(x2), wa/i-ma/i-ta-raq(x4), wa/i-na-raq,
wa/i-ma-raq, wa/i-raq, wa/i-ta-raq(x2); a-wa/i(x6)

A2+3: wa/i-mu-raq, wa/i-sa-raq(x4), wa/i-tú-raq(x2), wa/i-mu-raq,
wai-tu-raq, wa/i-ta-raq(x2); a-wa/i(x3)
カルケミシュの古層碑文であるA4b碑文においては、wa/i-ta-qa(x2)、wa/i-tu-ta-qa
の計3例（本来の形態表現では、*aw/i-ta、*aw/i-tu-ta）のinitial-a-finalが散見
される。しかしながら、wa/iという文導入辞*aw/iの語頭aの省略形でinitial-a-final
が見られない例もあるので同現象の混用と見做される。
その後のSuhi王家の時期に作成されたA14b碑文では、initial-a-finalの表記例とし
ては、wa/i-ta-qaの例が確認されるが、a-wa/iという本来の形態表現を忠実に表出した例
も確認される。この表記は古層の碑文A4b碑文におけるa-wa/iのinitial-a-finalの省
略形wa/iと相違している。A1a碑文では、wa/i-sa-qa(x2)、mu-pa-wa/i-qa、wa/i-tu-qa(x3),
wa/i-mu-qa、wa/i-ta-qa、wa/i-mi-qiの用例が確認されるが、a-wa/i(x6)のような
initial-a-finalではなく、正確な語頭a-表記の語形も散見される。このような
initial-a-finalの特異な表現形式と語末の-aを語頭a-に移動した表記の混用の碑文は
A1a碑文、A11b+c碑文、A2+3碑文、A12碑文においても確認される。
その後のAstiru王家の時期に作成された碑文では、initial-a-finalの表記法は一例も
確認されない。A6碑文では、a-wa/i(x4)、wa/i-ta(x2)、wa/i-ma-ta5、wa/i-sa(x2),
wa/i-ná(x2)、wa/i-tu-u、wa/i-ara/iのような用例が認められる。Suhi王家の時期と相
違して、この時期の碑文にはinitial-a-finalの表記法が確認されない。a-wa/iのような
正確な音節文字表記とwa/i-ta、wa/i-ma-ta5、wa/i-sa、wa/i-ná、wa/i-tu-u、wa/i-ara/i
のような語頭a-の省略形のみである。これらの省略形は語頭a-からの省略ではなく、以前
から採用されていたinitial-a-finalの表記法の末尾-aの省略、つまり後代の書記はこの
特異な表記法の認識の欠如によって省略したものと推察される。A15b碑文、A31碑文、CEKKE
碑文も同様の傾向を明確に示している。更に、カルケミシュ最後の王Pisiriの時期に作成
されたA21+A20b碑文においても同様の傾向を示している。
以上のことから、initial-a-finalの表記法はヒッタイト王国時代から採用されていた
特異な表記法であったが、時代の推移とともに後代において衰退傾向となり、Astiru王家
（紀元前9—8世紀）の時期にはこの表記法は完全に使用されなくなっている。さらに、通
時的な変遷を考慮すれば、本来の文導入辞awaがinitial-a-finalによって、wa-qaとな
り、末尾要素の-a の initial-final の表記の意味が不明瞭になって省略されて文導入
辞 wa となる過程 (つまり a-wa > wa-tar > wa) が推察される。

つまり、Suhi 王家の時期の正式な a-語頭表記と initial-final の混用、その後の
Astiru 王家の時期の正式な a-語頭表記と initial-final 表記の語末-a の省略の混用の
様相から、initial-final という特異な表記法が、Astiru 王家の時期を通じて変容し
ており、このことは同表記法が象形文字ルウィ語の通時的な言語的特徴の指標として有力
なことを示している。

(2) r 転化

象形文字ルウィ語の表記法において、上記の initial-final と並んで、特徴的な表記
法として例示されるものに、r 転化 (rhotacism) が挙げられる。この表記は母音間の有声子
音 (主に-d-) を-r- で表出するものである。特に語頭には表出されないので、象形文字ルウィ
語表記においては、前接的人称代名詞-ata/-ara、奪格の単数/複数語尾-ati/-ari、3 人
称単数/複数現在形語尾-ti/-ri、3 人称単数過去形語尾-ta/-ra、3 人称単数命令形語尾
-tu/-ru において生起する現象である④。そこで、象形文字ルウィ語碑文のカルケミシュ
碑文を成立年代順に通時に r 転化現象の有無を観察した結果が以下のとおりである。

古期碑文

◎ A4b 碑文： r 転化表記なし

スヒ王家

◎ A14b 碑文： r 転化表記なし

◎ A1a 碑文： r 転化表記なし

◎ A11a 碑文： r 転化表記なし

◎ A11b+c 碑文： r 転化表記なし⑦

◎ A2+3 碑文： r 転化表記なし

◎ A12 碑文： r 転化表記なし

アスティル王家

◎ A6 碑文： zi-pa-wa/i-tar/i ("zin-pa-wa-ata “and on the other hand-it”
                wa/i-arai ("wa-ata “and-it”

◎ A15b 碑文： r 転化表記なし

◎ A31 碑文： ni-pa-wa-ra/i ("nipa-wa-ata “and or-it”
                wa/i-raa ("wa-ata “and-it”

◎ CEKK 碑文： "ARGENTUM"-r-i (""ARGENTUM"-ti “of silver”
                zi-la-pa-ra/i-hara/i (URBS) ("zilapalaha-ti “from the city Zilaparah"
                a-pa-ku-ru-ta-riri (URBS) ("apakuruta-ti “from the city Apakuruta”

-84-
上記の r 転化現象の有無による分類から、ほぼ明確な結論を導くことが可能である。つまり、先述の initial-α-final の後代における出現の衰退傾向とは逆に、r 転化の表出は後代に作成された碑文ほど表出傾向が顕著になっているということである。その時代区分の境目に当たる時期が、initial-α-final の衰退時期と一致して、Astiru 王家の時期から r 転化の出現時期が顕著になっているということである。上記の A15b 碑文と A21+A20b 碑文の文脈にも当然のように r 転化現象が表出すべきであるが、これはこれらの碑文内容箇所に象形文字での記述で r 転化形態が生起していないものであり、同碑文作成時期に r 転化の記述法が存在していなかったことを示すものではない。その証拠として、A15b 碑文の作成時期（Yariri 王の時期）の A24 碑文と TÜNP 1 の碑文には r 転化表記が散見されるし、最も後代に作成された A21+A20b の碑文時代（Pisiri 王の時期）に相当する A25b 碑文と A13a-c 碑文においても r 転化表記が散見される。それ故、r 転化表記は Astiru 王家の時期（紀元前 9 世紀末から 8 世紀初頭、つまり紀元前 900 年頃）以降に顕著に現われる特徴ということが、カルケミシュ碑文の成立年代別の分析から確認される。r 転化的用例は Morpurgo-Davies の指摘とは相違して、カルケミシュ碑文において確認できるものは、前接の人称代名詞の 3 人称単数中性対格形-ata と名詞単数奪格形語尾-ti に限られている。

4. おわりに

上記のことから、initial-α-final の生起の時代的な変遷傾向である同表出の後代における出現の衰退傾向とは逆に、r 転化の表出は後代に作成された碑文ほど表出傾向が顕著であることが指摘される。その時代区分の境目に当たる時期が、initial-α-final の衰退時期と一致して、Astiru 王家の時期から r 転化の出現時期が顕著になっているということである。つまり、Suhi 王家から Astiru 王家への変遷の時期が同時に語源的な時代変化の時期に対応すること、それは Suhi 王家以前の古層の音楽的特徴の保持と Astiru 王家以降の新しい音楽的変動傾向が語源時代区分上明確になっている。カルケミシュの国家に関するアッシリア文書では、Suhi 王家と Astiru 王家の関の紀元前 870-840 は Sangara 王の治世という記述がある。しかしながらこの王に関する記述は、カルケミシュの象形文字ルウィ語碑文には存在しない。アッシリアの記録によれば、同王はサマル、ウンキ、ビート・アディナ、キリキアと同盟を結んで、広範な外交政策を実施した王で周囲の諸国と
活発な交流があったことが推察される。おそらく、この拡大政策がカルケミシュの言語にも大きな内面変化をもたらした結果になったものと考えられる。それ故、Sangara 王の在位の紀元前 870–840 年の期間がカルケミシュにおける新旧の言語的特徴の交代時期に相応することが確証されると考えよう。今後は Sangara 王の時期の前後において、何故に新旧の言語的な変化が生じたかを周辺地域から出土した碑文分析を通じて明らかにする必要がある。

注

1) ヒッタイト王国時代滅亡以前のヒッタイト王・王妃の印章やヒッタイト王による岩壁や石室の碑文等は難解なものが多く、完全な解明には至っていないのが現状である：Poetto(1993)：Hawkins (1995)参照。


4) Hawkins (2000:72-223)：同資料の大半は国王碑文。なお、ASSUR 書簡文書はカルケミシュ商人による作成資料で、戦利品として当時のアッシリアの都アッシュールに運び込まれたものであるが、正確な作成年代が不明のため本稿の考察対象からは除く。

5) 前接的人称代名詞及び文小辞要素：-{ma/-mu/-mî} “for me”；-{tu} “for him”；-{ma(n)za} “for them”；-{sa} “he”；-{na} “him”；-{ta} (文小辞)：大城・吉田 (1990)；Payne (2004)参照。

6) 実際の象形文字表記としては-{ra} や-{ri} を示す単独の文字は存在しないので、前置された文字に付加する記号（文字整理番号 Nr. 383 ＜ ）によって-{ra} または-{ri} の両音節を示す合文文字-ra/i として記述される。それ故、前接的人称代名詞-ata/-ara と 3人称单数過去形語尾-ta/-ra の-{ra} 表記、奪格の単数／複数語尾-ati/-ari と 3人称单数現在形語尾-ti/-ri の-{ri} 音節はどちらも合文表記-ra/i から文脈分析によって-{a}母音形か-{i} 母音形かが決定されたものである：特に、Morpurgo-Davies (1982/83)参照。

7) A11c 5：AUDIRE+MFe-ta/ra/i-ru の語形は r 転化形ではなく、例外的に-rr-の重複した中受動 3人称单数命令形（＜*AUDIRE+MFe-ta(r)ru）。

—86—


Laroche, E. (1956) "L’ inscription Hittite d’ Alep", *Syria* 33, 131-141.


大城光正・吉田和彦 （1990）『印欧アナトリア諸語概説』大学書林.
